8 月 20 日のメッセージ

聖書：ヤコブの手紙　1：　19－27

「御言葉を行う」

「赤信号みんなで渡ればこわくない」

2021 年末、この言葉がちょっとした話題になりました。1980 年、漫才コンビのツービートが世間に広めたこの言葉が、『三省堂国語辞典 第八版』に収録されたからです。

「なぜ、今更」との思いもありますが、「この先しばらくは使われると見込まれる言葉」として収録されたとのこと。「今」につながるものがあるのでしょう。意味は「おおぜいでやれば、悪いことでも堂々とできるものだ。〔一九八〇年に、漫才コンビのツービートが広めた〕」(三省堂国語辞典 第八版)。

確かに、この言葉が表す集団心理の恐ろしさは、実際に流行した 1980 年代よりもむしろ今の方が感じられます。「みんなが言っているから」、「〇〇にそう書いていたから」と鵜呑みにして、他者を排除しようとする動きは年を追うごとに加速しているように思われます。

そこにあるのは真の正しさではなく、「何となく正しそうに思えること」だけ。何が本質であるかも知ろうとせずに、うわべだけで物事が動いていきます。

大きそうに見える流れに流されていれば、難しいことを考えなくて良いから楽なのでしょう。イエスを排除しようとした人々の中にも一定数、こういう人たちがいました(「ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。『働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけない。』」ルカによる福音書 13:14)。

彼らの、神の救いの、神の正義の本質を見ようともしない姿を、イエスは手厳しく批判されます(「しかし、主は彼に答えて言われた。『偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。』」ルカによる福音書 13:15-16)。

神の定めにも、無垢な思いで向き合うようにと勧められています(「わたしの心があなたの掟に照らして／無垢でありますように。そうすればわたしは恥じることがないでしょう。」詩編 119:80)。この無垢とは、何でも鵜呑みにすることではありません。自分勝手に言葉を定義するのではなく、素直に本質を問うていくことのできる素直さが求められています(「だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。」ヤコブの手紙 1:21)。

その上で、こう命じられるのです。

「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。」(ヤコブの手紙 1:22)

神の言葉は私を安心させてくれます。それは正しい。しかし、そこに留まるのではなく、もう一歩、隣人のために、世界のために踏み出せ、と命じられるのです。

「正義を洪水のように／恵みの業を大河のように／尽きることなく流れさせよ。」(アモス書 5:24)

「自分さえ良ければ」に留まることなく、この世界に生きる全てが、自分らしく、手を取り合って生きられるように、何ができるか考えることが大切です。独りよがりの正義でも、集団心理の正義でもなく、神がこの世界に求めておられる正義を実現していくこと。

最初はほんの小さなことでかまいません。聞いて、考えて、実践していく。この繰り返ししかありません。そして、この繰り返しこそが、「神を愛すること、隣人を自分のように愛すること」につながっています。

そして、このように生きる一人ひとりこそ、「御言葉を行う人」に他ならないのです。